

第1会場 セッション2 No. 4	移動診療車オンライン診療を支える看護師の役割 ～実践からみえた課題と展望～
	発表者 青木 恵 (高山市国民健康保険南高山地域医療センター朝日地域診療所) 共同研究者 和賀登 裕美、高原 文香、山口 瑠美、阪 哲彰、山下 龍士

はじめに

高山市は日本一広大な市域を有し、冬季の積雪や交通条件によって受診機会の確保が課題となっている。また、多くの医療機関は市の中心部に位置し、地域間で医療アクセス格差が存在している。

これらの問題解決のための手段として、出張診療所に通院する比較的健康状態の安定している患者を対象に、2025年1月から3月まで、移動診療車によるオンライン診療の実証運用を行った。



<はじめに>

広大な市域を有し、冬季には積雪のある高山市では、交通条件による住民の受診機会を維持することや医療人材の確保が課題となっています。また、中核病院を含めた多くの医療機関は市の中心部に位置し、地域間で医療アクセス格差が存在しています。こうした問題を解決するための手段として、2024 年高山市は移動診療車の導入を決定しました。これを受けて、出張診療所に通院する比較的健康状態の安定している患者さん 10 名を対象に、2025 年 1 月から 3 月まで、移動診療車によるオンライン診療の実証運用を行いました。

目的

移動診療車を活用したオンライン診療において、診療を受けた患者と、同乗して診療介助を行った看護師に対して調査を行い、現状と課題を整理する。

そこから、移動診療車オンライン診療を支える看護師の役割について考える。



<目的>

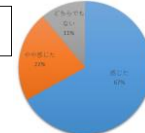
移動診療車を活用したオンライン診療の実証運用において、診療を受けた患者さんと診療介助を行った看護師に調査を行い、現状と課題を整理することで、移動診療車オンライン診療を支える看護師の役割について考えました。

実証運用に対する調査

方法と対象

- ・実証運用に協力した患者10名／無記名ご利用者様アンケート
- ・移動診療車に同乗して診療介助を行った看護師3名／聞き取り

Q. 診療所での診療と比べて、同じような診療が受けられると感じましたか。



<実証運用に対する調査>

協力してくださった患者さん 10 名に対し利用後の無記名アンケートを、診療介助を行った看護師 3 名からは聞き取りを行いました。

結果

【ご利用者様アンケートの結果より】

約9割の患者とその家族が「通常診療と同等・ほぼ同等と感じた」と、肯定的な回答

「看護師が居てくれて安心」「次も近くへ来て欲しい」という、今後の利用に対して好意的な意見

【看護師聞き取りより】

自分達がICTを活用することで身体診察が可能であり、オンラインでは把握しづらい情報も即時に医師と共有できたと実感

高齢者には診療車への乗降や移動時の介助が必要

通信・医療機器のトラブル発生に伴う、診療の中断や遅延

<結果>

ご利用者様アンケートの結果からは、約 9 割の患者さんから肯定的な回答を得ることができました。診療中看護師がそばに居ることによって安心できたとの感想のほか、自宅近くで診療を受けた患者さんからは、「また近くへ来てもらいたい。」という、今後の利用に対して好意的な意見が聞かれました。

看護師の聞き取りからは、自分達が ICT を活用することで、医師がその場に居なくても身体診察が可能であり、患者さんの表情や動作など、オンラインでは把握しづらい情報も医師と即時に共有できたとの実感が確認されました。

一方で、診療車は車高が高く乗車するのに段差が大きいことで、歩行が不安定な高齢者には移動介助を要すること、また、通信や医療機器のトラブルが

発生した時には、再接続などで診療の中断や遅延が生じ、診療が円滑に進まないことなどが課題としてありました。

考察

〔成果〕

顔なじみの看護師が同乗することで、患者の個別性への対応や緊張感が軽減
移動診療車の拠点場所によっては、患者の通院負担が軽減
今後の運用に対する期待感の把握
事前のトレーニングによる通信・医療機器の取り扱い方法習得により、医師へ正確に情報を伝達

〔課題〕

様々な診療に対応する能力向上のための学習や研修を継続
患者の移動介助や、車内外の動線における安全確保
通信・医療機器トラブル発生時の迅速な対応や体制の整備



<考察>

利用後のアンケートで高評価につながった要因として、普段の診療状況の情報共有ができていたことで、表情の読み取りや難聴者への支援など、患者さんの個別性への対応につながったこと、オンラインに不慣れた患者さんでも顔なじみの看護師が寄り添うことで、いつもの診療と変わらないと感じられ、緊張感が軽減されたことが考えられます。移動診療車の拠点場所の選定によっては、実際に患者さんの通院負担の軽減につながった例もあり、感想からは、今後の運用に対する期待もうかがえました。看護師は事前のトレーニングにより、通信・医療機器の取り扱いに慣れたことで、正確に情報を伝えることができたと考えます。

今後の課題としては、身体診察の精度を磨くと共に、様々な診療に対応できるよう、新しい機器やシステムへ順応するための学習や研修を継続していくことが必要です。自力歩行が可能であっても高齢者は歩行が不安定で、さらに冬季は路面の凍結なども併せ、車内外の動線における安全確保が重要となります。段差が大きいことへの対応として手すり付き3段ステップを設置しましたが、現状では車いす利用者は診療車に乗車することができません。通信や医療機器のトラブルが発生した時には、診療の中断や遅延が長引き患者さんの不安が増大することがないよう、冷静な状況の判断と迅速な対応が求められます。

結語

- ☆患者情報の共有や事前の調整
- ☆精度の高い情報の伝達
- ☆移動診療車オンライン診療におけるリスクマネジメント

看護師が自信をもって診療介助を行うことで、患者との信頼関係を維持し、安心して診療を受けられる移動診療を目指していきたい。

<結語>

移動診療車オンライン診療における看護師の役割は、いつもと変わらない診療と感じられるように、患者情報の共有など事前の調整を行うこと、学習や研修の継続により、より精度の高い情報を医師へ伝達すること、安全な診療環境と円滑な ICT 活用のためのリスクマネジメントだと考えました。

看護師が自信を持って診療介助を行うことで、患者さんとの継続的な信頼関係を築き、地域の皆さんが安心して診療を受けられる移動診療を目指していきたいと思います。